

## 受賞園からの喜びの声

下落合そらいろ保育園は、2017年5月に開園しました。東京都新宿区のビルやマンションに囲まれた都会特有の環境にあります。その環境の中で食育をどのように進めていくか、子どもたちに何を伝えたいか、感じてほしいか、学んでほしいかを職員全体で話し合う中で、調理師だから、看護師だから、保育士だからの「だから」を取り払い、職員全員がチームという意識をもって取り組んでいます。

子どもたちの「どうして?」「やってみたい」「しりたい」という探求心を、一つひとつ叶えていくことで学ぶことの大切さや面白さを知る。体験したことをまた次への疑問につなげていく。そうしたひらめきと学びを、日々の生活の中で大切にしながら取り組んでいます。今回、厚生労働大臣賞を受賞できたのは、子どもたちの声を拾い形にできた毎日の積み重ねの結果を評価していただいたことだと、大変感謝しております。ありがとうございます。

社会福祉法人幌北学園 下落合そらいろ保育園  
園長 新沼 佳子



### 審査員講評

下落合そらいろ保育園は、当コンテストの第14回、第15回で入賞されて、今回3回目の入賞で厚生労働大臣賞の受賞となりました。この園の食育活動が素晴らしいのは、保育士、栄養士、調理師などの職員の方々の連携がしっかりとれていて、食育計画を協力して作成していることです。それぞれの立場から子どもの姿を中心に捉えて、子どもの興味・関心により計画を変更するなど、柔軟に捉えて実施できている食育がとてもよいと思いました。

ともすれば、食育活動は保育士たちがしたい活動に陥りがちです。現在よく聞かれるのは「コロナ禍で食育活動ができない」ということです。「食育とは何でしょうか?」と尋ねる

と、コロナ禍の前まで実施していた「クッキング」「子どもたちの前での調理」などと言われます。確かに感染予防のために、多くの配慮が必要になりましたが、毎日食事を提供している園では、「食事提供」そのものが食育の基本でしょう。

園では、毎日ガラス張りのキッチン前で、調理作業の様子を子どもたちが見えています。ガラス越しに食材を見たり、調理する職員とコミュニケーションをしたりする場となっています。その興味を遊びに展開できるように、給食室のすぐ横にままごと遊びのコーナーを設置して、子どもたちが自発的に食への興味を発展させられるように配慮しています。

また、食事を「食べるもの」から「体をつくるもの」へと意識づけるために、毎日の給食の食材を題材にした「三大栄養素」に取り組んでいます。子どもたちはグループになって、それぞれの栄養素の役割を自分たちで調べます。栄養素の役割を理解することで、苦手なものであっても食べようとする意欲につながり、さらには、家庭の食事風景にも及んでいます。食べる理由について、「体のために」という感覚が育っていて、食育の基本がしっかり押さえられています。

どの活動も点で終わることなく次の活動につながり、広がっています。畑に行き栽培活動ができなかったコロナ禍の中では、バケツ稲の活動をしています。稲を収穫した後、二毛作による小麦栽培ができることに気づき、1年かけて小麦栽培にも取り組みました。収穫した小麦粉を使って作ったお菓子の家は、園での活動が保護者にもしっかり伝わるメッセージになっていました。

栽培活動から地域交流にもつながり、いろいろな野菜の栽培につながりました。今まで育てたことのないブロッコリーを、地域の支え合い支援活動からの誘いで収穫することができ、それを調理して食べるまでのつながりも見事です。ゆであがったブロッコリーの鮮やかな緑色に歓声をあげる子どもたち。ふだん給食に出ているものとの違いにも気が付いている様子に感心しました。

都会の園ではできない畑での体験も、コロナ禍で控えていた活動を再開し、じゃがいも掘りからアスパラ栽培につなげています。絵本や図鑑で見ていたじゃがいもを実際に掘り出した時の興奮。保育者の仕掛け方が秀逸だと感心しました。じゃがいも料理の「いももち」から郷土料理、食文化にも興味が広がり、郷土料理大会へとつながりました。

「いのちを考える」がテーマの活動も、魚を図鑑で調べてから「魚釣り」体験をし、「魚市場」を映像で見て、せりの場面に興味をもちます。そこから魚の解体へとつながりました。解体した時に食べられない部分の処理をコンポスト作りや、栽培の肥料作りにつなげています。

点を線につなげ、さらに線を面にして、さらに立体に……というように、子どもたちの興味を膨らませている保育・食育がとてもすてきです。

「食育は生活に密着した学び」とするために、保育と食育が合体した計画にもとづいて活動が展開されていること、いろいろな活動に発展されていることがよくわかります。保育も食育も、計画 (P)、実行 (D)、測定・評価 (C)、対策・改善 (A) のくり返しで進めていくことが求められています。これからも、子どもたちがいろいろな経験から学び、さらに興味を膨らませていく様子を見ながら、保育者の皆さんと一緒にわくわくしながら経験し、学び、次への課題を求めて展開していくことを期待しています。

岡林 一枝 (食育コンテスト審査委員)

※本文は「第17回食育コンテスト事例集」に記載された、講評に加筆したものです。